

シシトウやキュウリなどが実った畑で語る小松ひとみさん(香美市香北町岩改)



田島征彦さんら新作絵本 食害めぐる人と動物描く

「食害めぐる人」を育てているじいさん。畑を荒らす動物たちを捕まえてこらしめようとするのだが、型絵染作家で絵本作家の田島征彦さんが描き、木村裕一さんが文章を担当した絵本「いもさいばん」(講談社)「写真下」がこの夏刊行された。18日からは高知市で「陽気な型絵染 田島征彦展」が始まり、絵本の原画も展示される。物語が生まれるきっかけには、動物たちの食害でさんざん目にも撞い、我慢に我慢を重ねている香美市の女性が詠んだ1編の詩があった。

(天野弘幹)



ことしの夏、同市香北町の知人がこの詩を読んで「いもさいばん」刊行に出あいで暮らす小松ひとみさん(58)の元に郵便物が届いた。面識のない田島さんから、中には「いもさいばん」の絵本と手紙、詩のコピーが同封されていた。詩は、高知新聞の「高知文芸」の2007年10月13日付)の詩壇に採用された小松さんの作品「言い分」だった。丹念に育てた米や野菜を食い荒らされ、動物たちに「お互いに言い分もあるろうき、話し合いをしようじゃないか」と持ちかけた言葉で始まる独白の詩だ。

田島さんによると、高知の知人がこの詩を読んで「いもさいばん」刊行につながった。こうして絵本を初めて知った小松さんは「びっくりしました。開けて、読んで、涙が出たと話す。3人暮らし山あいを縫つ一本道のわき、北岩改に小松さんの家はある父の幸之さん(82)の母の芳美さん(80)、長女のひとみさん(3人暮らし)。そこから奥に人家はなく、最寄り家は約1キロ下手。同じ北岩改にあった隣家がなくなつて、既に50年がたつという。家は築約60年。裏の岩か

らしたたる清水をためて飲み、季節ごとに山菜を採り、約40種類の野菜や果物を育てる。今収穫期なのがサツマイモ、サトイモ、オクラ、シシトウ、キュウリ、クリ」とひとみさん。年中いろいろなものを育て、美良布の良市に出荷し、残りを自宅で食べる。以前は夏場に米や麦も作り、冬は炭焼きをしていたそう。水田は急な山道を30分かけて歩いた先があった。35年ほど前、稲穂が食い荒らされてめっちゃめちゃになつて、わなで捕まえてみると大イノシシだった。食害は次第に増加。最近手を焼いているのが、シカやイノシシ、ハクビシン、野ネズミ、モグラ、アナグマ、タヌキなどだ。父親が手作りで建てたといふ離れで、ひとみさんと芳美さんに話を聞いてみると、汗だくの幸之さんが帰ってきた。幸之さんは夕方クリ拾いに掛ける。朝から夕方にかけて落ちた実を小松さんたちが拾い、夜中に落ちる

実はイノシシが食べる。取り分は、半分もない。夜の方が落ちるから。イノシシの方が、人間よりよく食べている」とひとみさんたちは苦笑する。「動物はこい。何年か前にカボチャが全滅した。こりやかなわんと思うた」と幸之さん。「何カ月もかけて育てて、さあ、あした採ろうと思つたら全滅。半分はあても残してくれりゃあいいのに」と、ひとみさん。幸之さんは「こつぽりやられた時には腹が立つ。捕まえてちやうどと思う。捕まえて殺して肉食うたり、放り出してキツネに食わしたりする」と話し、「そんな殺生なことばかりしよらあ。殺せんようにすりゃ、自分が死ぬ。動物たちには、畑荒らしをこらえてもらいたい」とかみしめるように言う。

香美市女性の詩きっかけ

小松ひとみさんの詩「言い分」

お互いに言い分もあるろうき
話し合いをしようじゃないか
ちつとばあのことじゃつたら
私らあもこんまいことは言わんけ
んど
あんたらあチックトわりことがす
ぎるぞね
芋もありたき食べて
米も半分もとれざつた時もある
まあその太い体じゃき
どっさり食べんと生きてはいけん
ろう
子供もおるき? そらそうじゃお
それにしても私らあなんきをあ
んたらあ知つちゅうかね
命ちぢまるばあ一所懸命作りゆう
ぞね
私らあも米も野菜もないなつたら
暮らせん
もう畑の物はとりません言うて書
きもんでもしてくれんろうか
猪とだけ印を押してくれたらえい
がやき

きょう田島さん
トークやサイン会
高知市のキャラリー
「陽気な型絵染 田島征彦展」は18日、10月2日に、高知市横内の星テラスアートヴィレッジで行われる。京都の祇園祭を描いた型絵染や絵本原画を展示。初日の午後2〜3時に田島さんのキャラリートークがある。無料で申し込み不要。終了後、書籍購入者対象のサイン会がある。